

東アジアにおける韓国の大衆文化(韓流) その現状と展望

金 光林

はじめに

近年、東アジア諸国¹⁾ではドラマや映画、ポップスなどに代表される韓国の大衆文化(ポピュラー・カルチャー)²⁾が人気を得ている。韓国の大衆文化を指す「韓流」と呼ばれる新造語が出現し、広まっている。本稿では、この新しい社会現象に着目し、東アジアにおける韓国の大衆文化の現状を調べ、これとほぼ同じ性格を持つアメリカの大衆文化、香港の大衆文化、日本の大衆文化の東アジアにおける受容過程と比較しながら、韓国の大衆文化の特徴と今後の展望を探りたい。

もちろん東アジアにおいて韓国の大衆文化が注目されたのはここ数年のことであり、現在進行形の文化現象でもあって、マスメディアにおける報道は目立っても、学術的な意味での調査がほとんど行われておらず、マスメディアの報道資料だけを使って研究を行うのはいささか性急な面がある。また本稿を準備するに際して、調査資料の大半をインターネットから入手している。そのために大量の最新の資料を簡単に入手できた反面、資料の信憑性を十分に検証しにくいという面も確かにある。事実、筆者は韓国語、日本語、中国語を使ってインターネット上の「韓流」に関する資料を大量に収集したのであるが、これらの資料の取捨選別、内容の信憑性の確認、注釈と参考文献の表示の問題などにおいて経験不足による戸惑いもあった。それでもこれからの論文作成においてインターネットの利用は不可欠なことであり、経験不足を覚悟しながらも本稿をまとめ、今後のさらなる研究の手がかりにしたい。

1. 東アジアにおける韓国大衆文化の現状

(1) 「韓流」という新造語

「韓流」という新造語は1999年11月のCLONと2000年2月のH.O.Tの韓国の二つの人気アイドルグループの中国北京公演の成功(H.O.Tの公演には1万3千名以上の観客が集まったと言われる)を機に「韓国音楽」「韓国文化」を意味する言葉として中国で出現

し、ちょうどこの二つの公演の時期が冬だったので、「寒流」ならぬ「韓流」が北京に襲来したというふうに報道されたという³⁾。2000年7月の韓国のアイドルグループNRGとタレントの安在旭の中国公演で「韓流」という言葉が中国のマスコミにおいて定着したといい⁴⁾、現在は中国、韓国、台湾、香港、日本などでこの新造語が認知されつつある。

一例に、最近インターネットの検索サイト「YAHOO」で調べたところ、「YAHOO CHINA」には、韓流を主な内容とするサイトが四件見つかり、韓流に関連するウェブページが十数件載っており、「YAHOO HONG KONG」「YAHOO TAIWAN」にも十数件、「YAHOO JAPAN」「YAHOO KOREA」にはそれぞれ数百件以上のウェブページが載っている。もちろん、「YAHOO JAPAN」「YAHOO KOREA」には重複するウェブページも多いのであるが、それでも以上のデータは「韓流」なる新造語がインターネット上ではかなり認知されているということを説明している。これらのウェブページの記事ソースが中国と日本・韓国の新聞・雑誌であることが多い⁵⁾のをみれば、「韓流」という新造語がインターネットの上だけではなく、新聞・雑誌などでも認知されていることが分かる。

余談ではあるが、2001年11月にブルネイで行われたASEAN+中韓日三国首脳会議での中韓日の三国首脳の会談で中国の朱鎔基総理が中国における「韓流」を話題にしたというニュースもある⁶⁾ほどである。

(2) 東アジアにおける韓国大衆文化の現状

韓国の大衆文化は1990年代後半から上昇気流に乗り始め、ここ数年東アジア諸国で広まるようになった。韓国大衆文化のブーム(「韓流」)を引き起こしたのはテレビドラマからである。

1997年に中国のCCTV(中国中央テレビ局)で韓国のドラマ『愛とは何か』が放映され、高い視聴率を記録したため、他の幾つかのテレビ局で再放映された。それからここ数年間、『星を我が胸に』『初恋』『さようなら我が愛』『医者兄弟』『モデル』『トマト』『花火』『ホテルリア』『ひまわり』『イブのすべて』『秋の童話』『守護天使』などのドラマが相次いで中国の複数のテレビ局で放映され、一部は相当な人気を得たと言われている⁷⁾。

中国で人気を得た韓国のドラマはやがて香港、台湾などの中国語圏、ベトナム、シンガポール、モンゴルなどの中国文化圏の国や地域でも放映され、中国同様好評だったと言われている。『初恋』はモンゴルでは視聴率90%(2001年)を超え、『秋の童話』は台湾で13週間も視聴率1位(2001年)を記録したと伝えられている⁸⁾。

今年に入っても、韓国のドラマ『冬の恋歌』『ガラスの靴』、韓国の時代劇『明成皇后』『商道』が台湾で放映されているか、または放映が予定されているという。『冬の恋歌』は香港でも大変人気が出ているという⁹⁾。

韓国のドラマがここ数年中国など東アジア諸国で急に人気を得ているのに比べると、日本ではそれほど注目されず、むしろ映画の人气が先行した感がある。それでも韓国のドラマは現在日本で少しずつ注目され始めている。2001年のフジテレビのドラマ『ファイティングール』に韓国のタレントのユン・ソナが日本の深田恭子と一緒に出演して注目を浴び、今年の2月に日韓合作ドラマ『フレンズ』(日本のTBSと韓国のMBCの共同制作)が両国間で話題を呼び、このドラマに深田恭子と一緒に主演した韓国のタレントのウォンビンが日本の若者の間で大変人気を得た。昨年に中国、香港、台湾で人気を得たドラマ『秋の童話』が今年の5月からBS日本テレビと東京MXテレビで放映されたといい、10月からは韓国の人気ドラマ『イブのすべて』が朝日テレビとその系列放送局を通して全国で放映されており、同じ10月に東京MXテレビで『新貴公子』(韓国MBCの2000年ドラマ)が放映されているという¹⁰⁾。

以上のように韓国ドラマの人气は東アジアのほぼ全域に及んでおり、その人気にあやかって東アジアでは近年に韓国との合作ドラマの制作と韓国タレントのキャスティングが目立つようになった。

2001年に中国と韓国の最初の合作ドラマ『モダンなファミリー』(中国CCTV制作、韓国タレント数名出演)が制作され、中国湖南テレビ局と韓国のチョロクペムメディア社が2001年にドラマ『マンション』を共同制作し、今年の2月から中国で放映されたという。このドラマには、中国で韓国大衆文化のブーム(韓流)を引き起こした主役であり、人気タレントである安在旭が主人公に抜擢されたという。今年の10月には、韓国と中国の若者の愛を描いた韓国のKBSと中国のCCTVの合作ドラマ『北京 我が愛』が撮影に入り、そこに複数の韓国のタレントが主人公、助演として出演するという。このドラマは2003年から中国・香港などの中国語圏で放映される予定だそうである。また韓中両国合作によるドラマ『I LOVE YOU』(韓国のイ・ソグン脚本・演出、北京テレビ芸術センター制作)が現在撮影中であり、そこには韓国のタレントのハ・ジウォンが主人公としてキャスティングされたといい、中国北京テレビ局が制作中の時代劇『一人のデモ』に女性主人公として韓国のタレントのキム・ミンがキャスティングされたという¹¹⁾。

日本では、フジテレビと韓国のMBCの合作ドラマ『ソナギ 雨上がりの午後』が現在撮影中であり、このドラマでは日本のタレントの米倉涼子と韓国のチ・ジンヒが主演するという。テレビ朝日制作中の秋のドラマスペシャル『君に愛をうたおう』は日韓の若

者の恋を描き、日本の稲垣吾郎と韓国のキム・ユンジョン(映画『シュリ』を主演)が主演するという¹²⁾。

ドラマに続いて、韓国の映画もここ数年間東アジア諸国で好評を得ている。日本では94年に韓国の伝統芸能 パンソリに従事する一家の愛憎を描いた『風の丘を越えて - 西便制』が話題になり、98年には恋愛映画『八月のクリスマス』が上映されて韓国映画のイメージを大きく変え、2000年には南北朝鮮の対立を背景にしたスパイ映画『シュリ』が大ヒット(観客が100万人を超えたといわれる)してから、『美術館の隣の動物園』『JSA』『ユリョン』『リベラ・メ』『イルマーレ』『リメンバー・ミー』『春香伝』『燃ゆる月』『反則王』『チングー友』などの韓国映画¹³⁾が次々と上映されており、韓国映画が日本で広まりつつある。日本では現在まで『シュリ』と『JSA』(板門店の共同警備区域における南北朝鮮の兵士の友情と葛藤を描いた映画)が興行に成功し、他の映画は興行という点ではまだ成功というほどではないと言われる¹⁴⁾が、若年層を中心に韓国映画のファンは確実に増えており、この勢いだと韓国映画は日本で認知度がさらに高まる可能性がある。

同じ時期、以上の映画が中国、香港、台湾などでも正式な上映、またはビデオとして出回り、その他にも韓国の映画『飛天武』『武士』『猟奇的な彼女』が中国の若者の中で歓迎されたという。中国では韓国の映画がドラマのように正式に上映されることが少ないようであるが、韓国で人気のある映画は大概海賊版ビデオとして出回り、韓国の新世代女性の破格的な行動を描いたロマンティック・コメディ映画『猟奇的な彼女』が若者たちの間で大人気を得たと言われている。香港では『八月のクリスマス』が韓国映画のイメージを大きく変え、その後、『シュリ』『JSA』『猟奇的な彼女』などの映画の人気が高かったという¹⁵⁾。

映画においても、韓国と東アジア諸国との合作が増え、韓国の俳優の活躍の場が広がっている。

2001年には、韓・中・日三国の合作映画『武士』が制作され、韓国と中国の人気俳優のチョン・ウソン、安成基、章子怡らが出演し、すでに韓国と中国で公開された。韓国と香港の合作映画『トイレはどこですか』(韓国のデジタルネガ企画・投資、香港のフルーツ・チャン監督)は今年の9月の第59回ベネチア映画祭で審査委員特別賞を受賞した¹⁶⁾。

現在、韓国・中国・アメリカの合作映画『明成皇后』(明成皇后は朝鮮王朝末期の高宗の皇后で、日本の浪人により殺害)の制作が準備されており、韓国と中国の合作映画『夢遊桃園』(中国の陳凱歌監督、韓国の俳優李政宰主演)の制作が予定され、韓国・

タイ・香港合作のオムニバスホーラ映画『三更 / THREE』が制作中であるという。最近ではドラマ『冬の恋歌』で主演したことにより、香港・台湾で人気が上がっている崔智友が香港の映画『落花のような青春』の女性主人公にキャストされたという¹⁷⁾。

韓国と日本の合作映画も増えている。韓国・日本・香港合作の映画『春の日は過ぎ行く』が2001年に制作され、韓国ではすでに昨年に上映され、日本と香港でも近いうちに上映される予定だという。この映画は韓国の人気俳優ユ・ジテと女優李英愛が主演している。他にも、韓日合作映画『GO』(原作は金城一紀の同名小説、この小説は第123回直木賞を受賞し、映画『GO』は今年の第25回日本アカデミー賞 8部門で受賞した)が2001年に制作され、他にも、『親分はイエス様』(2001年上映)、『純愛譜』(2001年上映)、『K T』(2002年上映)、『夜を賭けて』(2002年上映)、『ソウル』(2002年公開)、『2009ロストメモリーズ』(韓国で2002年上映)などの映画が韓日合作映画として制作されたという¹⁸⁾。

東アジアで注目された韓国映画はその一部が欧米などにも輸出されるようになった。美術映画『飛天武』がフランスに輸出され、『JSA』がアメリカに輸出されたと言われている¹⁹⁾。

また、ここ数年間、韓国映画は国際映画祭においても評価されるようになり、幾つもの映画賞を受賞し、国際映画祭に出品する映画も増えている。今年の5月に第55回カンヌ国際映画祭で韓国の林権沢監督の映画『酔画仙』が監督賞を受賞し、今年の9月には第59回ベネチア国際映画祭で韓国の李滄東監督の映画『オアシス』が監督賞、同映画で主演したムン・ソリが「新人俳優賞」を受賞したと伝えられる²⁰⁾。

他にも韓国のチュ・キョンジュン監督の映画『童僧』が今年の6月に第6回上海国際映画祭で脚本賞を受賞し、この映画は現在凡そ10ヶ所くらいの国際映画祭に招待されていると伝えられる。10月には第47回アジア・太平洋映画祭で韓国の洪尚秀監督の映画『生活の発見』が監督賞を受賞したと伝えられる²¹⁾。韓国の映画が過去にも国際映画祭で受賞した例があるが、国際的に有名な映画祭であるカンヌ国際映画祭、ベネチア国際映画祭で受賞したことは韓国映画界にとっては正に快挙であり、韓国の映画が名実ともに進歩したことを物語る。

ドラマ、映画に続いて、韓国のポップスも東アジアにおける韓国の大衆文化のブームに加勢している。CLON、NRG、H.O.T、Baby voxなどの韓国のアイドルグループの中国公演が好評になり、2000年2月のH.O.Tの北京公演には1万3千余名の観客が集まり、H.O.T、NRGのアルバムは中国でそれぞれ40万枚、20万枚以上売れたと言われている。2001年5月には中国北京の中華世紀壇で、韓国の安在旭、Baby vox、柳承俊らが出演した「韓中スーパーコンサート」が開催され、中国における韓流の熱気を持続

させたという。Baby voxはこれまで中国の大都会で14度のライブコンサートを行い、韓国の女性アイドルグループのピンクルが台湾公演で人気を上げてから、今年の6月に中国への進出を果たし、現地でレコード発売と同時に大掛かりなコンサートを行ったという²²⁾。もう一つの韓国の人気アイドルグループS.E.Sの活動も日本と台湾で注目されている。S.E.Sはこれまで日本で6枚のアルバムを出し、今年の5月には台湾のテレビ局に招かれて公演を行い、台湾で発売されたアルバム「LOVE」が人気を得ていると言われる²³⁾。

最近、日本では韓国の少女歌手BoAの活躍が目立つ。1999年の秋に韓国で13才で歌手としてデビューしたBoA(本名権珉雅)は、2000年8月に日本で最初のアルバム「ID; Peace B」を出し、以後、人気アルバムを次々と出している。今年の1月17日には、彼女のシングルアルバム「LISTEN TO MY HEART」がオリコンの週間チャートで3位を記録し、今年の9月23日には、シングルアルバム「奇跡」と「VALENTI」がオリコンのデイリー・シングルチャートでそれぞれ2位と6位を記録したと言われている²⁴⁾。

BoAは今年8月に浜崎あゆみら日本のトップスターとともに全国ツアーに参加し、9月17日には世界的にも有名なイギリスのポップバンド「ウエストライフ」とデュエットし、10月からテレビ朝日で放映する韓国のドラマ「イブのすべて」の主題歌を歌うなど、旺盛な歌手活動が伝えられている²⁵⁾。

韓国の大衆文化がブームになるにつれて、東アジア諸国で認知されるスターが多く出現している。中国ではテレビドラマを通して、安在旭と金喜善の人気が高く、金喜善は2001年の中国のテレビコマーシャルで最も人気のあるTOP10のモデルに選ばれたという(電気メーカーTCLのコマーシャルに出演)。最近では映画『猟奇的な彼女』を主演した全智賢の人気が中国の若者の間で上昇しているという。香港のCETVが2001年にアジアを対象に行った「アジアTOP10スター」に、韓国の宋承憲、宋惠喬の二人が選ばれたといわれる。この二人はドラマ『秋の童話』を主演したことにより、中国・香港・台湾などで人気を得たタレントである。ベトナムでは、ドラマ『火花』『トマト』などの人気で張東健、金南珠の人気が高く、他にもウォンビン、車仁表、李英愛の人気が香港、台湾で高いと言われ、最近ではドラマ『カラスの靴』を主演した金賢珠の人気が台湾で上がっていると言われている²⁶⁾。日本では映画『8月のクリスマス』『シュリ』『JSA』、ドラマ『フレンズ』などを通して、ハン・ソッキュ、沈銀河、李英愛、ウォンビンらが知られるようになり、歌手BoAも注目されている。

ミュージカルにおいても、韓国の活躍が聞こえている。90年代に韓国の伝統打楽器パフォーマンス『サムルノリ』が日本と欧米で人気を集めていたが、近年は食堂の料理士

らが繰り広げるエピソードと『サムルノリ』のリズムを結合したミュージカルパフォーマンス『NANTA』(乱打)が外国でも人気があり、すでに日本で数回の巡回公演が行われ、アメリカのブロードウェイにも進出することになったという。アメリカのブロードウェイでは、すでに韓国のミュージカル『明成皇后』が公演されたことがあり、日本でもこれまで『NANTA』以外にも、『地下鉄1号線』『ギャンブラー』『八万大蔵経』『春香伝』などのミュージカルが公演された²⁷⁾。

アニメ・漫画においても、韓国の実力がかなり上がったといわれ、日本のアニメの制作に韓国人スタッフが加わるが増えており、韓国の漫画が日本と台湾で連載、または出版されていると伝えられる²⁸⁾。

IT産業の発達に伴い、韓国ではオンラインゲームの制作が盛んになり、韓国のオンラインゲームの利用者が中国と日本で増え始めているという²⁹⁾。

韓国料理が東アジア全域で人気を集めていることは周知の事実であり、韓国のファッションに対する注目度も上がっている。数年前から韓国のドラマの影響で中国・台湾・ベトナムなどで韓国のファッションに対する関心が高くなり、韓国人タレントのファッションを真似る事例も多く出ていられる。韓国のファッション業界の中国進出のニュースも出ている。日本でも若い女性を中心に韓国の整形美容に関心が上がり、そのために韓国を訪れる事例も増えている³⁰⁾。

韓国のドラマ・映画の人気にあやかって、人気ドラマ・映画の原作を中心とする大衆小説(通俗小説)が中国で多数出版されているとも言われている³¹⁾。

以上のように、ここ数年東アジアの各地でドラマ、映画、ポップス、ミュージカルからゲーム、料理、ファッション、大衆小説など、文化・芸術から飲食・ファッションまで広い意味での韓国の大衆文化が受容され、歓迎されている。この社会的現象がいわゆる「韓流」という言葉で表現されており、何か特定の分野での一過性の人気ではなく、大衆文化のほぼ全般にわたっており、確かに一つのブームでもある。東アジアにおけるここ数年の韓国の大衆文化のブームはちょうど80年代に東アジア各地で起きた日本の大衆文化のブームとその性質が極めて似ており、両者を比較してみるのも意味のあることである。

(3) 韓国大衆文化が歓迎される理由

東アジアにおいて近年、韓国の大衆文化が歓迎される理由をインターネット上の「韓流」関連記事から調べてみると、ドラマ、映画、ポップスなどに代表される韓国の大衆文化は、西洋の大衆文化と日本の大衆文化を本国の文化と調和させることに成功したの

で新鮮な特色があり、なお中国文化圏では儒教の価値観を媒介とする情調的な共感帯があるので受け入れやすいという論調が目につく。

韓国のダンス歌謡の破格的な律動性(ダイナミックさ)がバラード中心の落ち着いた音楽に慣れた中国の若い世代に新鮮な衝撃を与え、多くの韓国ドラマの共通のテーマになっている純粋な愛と情熱的な人間関係が商業主義社会に疲れた人々の心を捉え、映画においては、アクション映画、コメディ映画など韓国映画の題材が広がり、制作技術が格段と向上したことが韓国映画を面白いと思わせるようにさせた。他にも、個性と演技力のある新世代タレント・俳優が次々と登場し、彼らの人気に引き付けられて韓国の大衆文化が好きになっていることも多い。

中国・モンゴル・ベトナムなどからすれば、韓国の大衆文化を通して近代化された豊かな物質生活、都会的なライフスタイルに憧れる側面もあるように思われる。

韓国の大衆文化の全体的な質の向上と企画力・宣伝手段の発達、社会主義体制のさまざまな規制により中国の大衆文化の発達が遅れている点、香港が97年に中国に返還されてから大衆文化が低調である点、日本が長年の不景気により大衆文化においても海外進出が積極的でない点なども韓国の大衆文化がここ数年間東アジア諸国で目立つ要因として上げられている。

とにかく80年代までアメリカの大衆文化、日本の大衆文化の模倣が多く指摘されてきた韓国の大衆文化(現在もそのような問題が完全に克服されては無い)がここ数年これほど注目されるようになったのは、一種の隔世の感もあり、この問題についてより深層的な分析も必要であると思われる。

次に東アジアにおける韓国の大衆文化の問題をこれまで東アジアにおいてアメリカの大衆文化、香港の大衆文化、日本の大衆文化の受容過程と比較しながらその特徴を分析してみたい。

2. 東アジアにおける韓国大衆文化の特徴

(1) 東アジアにおけるアメリカの大衆文化

第二次世界大戦後の東アジアのいわゆる自由主義圏では、アメリカの軍事・経済の強い影響力の下にあり、文化の面においても、アメリカの大衆文化がこの地域に一種の「アメリカン・ドリーム」として伝播され、受容された。チューインガム、チョコレートなどの食品から、アメリカの最新のファッション、漫画、ウォルト・ディズニーのアニメーション、ホーム・コメディテレビ番組、ハリウッド映画、アメリカ発のジャズ

などの大衆文化は東アジアの自由主義圏（日本・韓国・香港・台湾）に絶対なる影響を与え、この地域の生活文化と価値観まで大きく変えたと言える。東アジアにおけるアメリカの大衆文化の影響は冷戦終結後も、むしろ中国・ベトナムなどの社会主義圏にまで広がり、現在もなお東アジアの大衆文化（ポピュラー・カルチャー）の主役の座を占め続けている。

第二次世界大戦後のアメリカの大衆文化の東アジアにおける受容過程をみると、それはアメリカの圧倒的に強い軍事・経済力が背景にあり、同時にアメリカの民主主義・自由などの理念が大衆文化とともに流入したので、アメリカの物質的な豊かさとアメリカの民主主義・自由はともに東アジアの人々の憧れの対象になり、それが「アメリカン・ドリーム」として夢を膨らませた。アメリカの大衆文化の主な受け手は戦後の東アジアで形成された中産階級と若年層である。

（２）東アジアにおける香港の大衆文化

一方、東アジアでは70年代頃から香港の映画、特に武術映画（カンフー映画）が注目され、80年代には東アジア全域で受け入れられ、世界にも広まった。ジャッキー・チェン、周潤発、李連傑らの香港の俳優の名前はアジア、そして世界にも知られるようになった。他にも、東アジアの中国語圏（中国・香港・台湾）と東南アジアの華僑社会では80年代頃から香港のドラマ、ポップスの人気も高く、香港がアジアの中国語圏と華僑社会における大衆文化の発信基地であるという点も見逃せない文化現象である。

台湾からは80年代に歌手テレサ・テンが登場し、欧米のポップスやラテン音楽や日本の歌謡曲のカバー曲により、アジア全域でファンを獲得した。台湾の映画は80年代後半から東アジアで注目されるようになり、候孝賢監督の『非情都市』が89年にベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞し、蔡明亮監督の『愛情万歳』が94年にベネチア国際映画祭でグランプリを獲得するなど、国際的に評価される作品が幾つも出現した。映画について言えば、80年代から中国大陸でもいい映画が多数制作され、張芸謀・陳凱歌らの監督、鞏俐・章子怡らの俳優が国際的に評価されている。ただ、現在のところ、台湾からは一部の映画以外は東アジアで広く受容される大衆文化が量産されておらず、中国大陸も映画以外は大衆文化の世界において目立つような躍進が見られない。これはおそらく、台湾は大衆文化の市場規模が小さいことにより、商業性に依存する大衆文化が成長しにくく、中国大陸では体制上の特性から大衆文化に様々な規制がかかり、また大衆文化が大衆文化産業として成長する経済的基盤、ノウハウが蓄積されていないように思われる。

以上のように見てみると、東アジアの中国語圏でも香港の大衆文化の存在感が大きく、

東アジアにおいてこれまで香港が物流・情報の中心にいたこと、イギリスの統治下で自由主義社会であり、文化的に西洋と東洋の中継地(特に中国語圏で)のような存在であったこと、同地域において経済が相対的に発達して、文化産業が形成する経済的基盤が存在したことなどがその背景にあったと考えられる。

(3) 東アジアにおける日本の大衆文化

1980年代から東アジアにおける日本の積極的な経済進出と並行して日本の大衆文化が東アジア諸地域で受け入れられた。80年代から日本で発明されたカラオケが各国に広まり、それと同時に日本の歌謡曲が広い範囲で歌われ、日本の多くのテレビドラマが東アジアの各地で放映された。『東京ラブストーリー』や『101回目のプロポーズ』などのトレンドイ・ドラマに人気が集まり、特にNHKの連続ドラマ『おしん』は大きな話題を呼び集め、おしんの成功物語は東アジアの人々に大きな感動を与えた。80年代の当時はチャゲ&飛鳥、谷村新司、光GENJI、山口百恵といった日本の歌手やタレントの人気が高かった。日本の映画も注目され、中国では高倉健、山口百恵の名が知れ渡った。筆者自身が80年代前半の大学生だった頃、山口百恵主演のドラマ『赤い疑惑』の放映の時間になると学生たちが勉強を止め、テレビに見入っていた情景が今も脳裏に残っている。同時に『ドラえもん』『ちびまる子ちゃん』『クレヨンしんちゃん』『セーラームーン』などの漫画やアニメにも人気が集まり、日本のファッション、焼き鳥・寿司などの日本料理も歓迎された。

80年代から90年代の前半にかけて日本の大衆文化は東アジア(東南アジアも含む)でブームを引き起こしたのである。現在はこの時期ほどの熱気は見られず、特に日本のテレビドラマの存在感が見えなくなっている。それでもポップスの世界では、数年前は安室奈美恵、最近はず多田ヒカル、浜崎あゆみらの人気が高く、日本のアニメ、漫画は依然東アジアにおいて主導的地位を占めている。宮崎駿監督のアニメ映画『千と千尋の神隠し』が最近韓国で観客が200万人を突破するほどのヒット作になっている。

80年代に日本が東アジアで積極的な経済進出を進めた時期と並行する形で日本の大衆文化が東アジアで受容された。こういう事実から分かるように、日本の大衆文化の背景には日本の強い経済力が存在し、豊富な資本と技術力をバックに大衆文化が産業として成立し、消費者に魅力のある文化商品を提供できたことが日本の大衆文化が東アジアで広まった大きな理由であろう。一方、受け入れ側にしても物資的に豊かな国 日本への憧憬という心理的要素も働いたものと考えられる。

同時に、これまでのアメリカの大衆文化とは一味違う、西洋的な要素と東洋的な情緒

がうまく調和された日本の大衆文化に東アジアの人々が新鮮な魅力を感じたのも事実である。日本の大衆文化の持つ一つの特徴が立教大学の五十嵐暁郎教授が指摘する通り、西洋的な感性をアジア的に読み換えた日本の『翻訳』文化にあり、欧米オリジナルの文化がこの日本の『翻訳』文化によって東アジアで受容しやすくなっていたのは確かであろう³²⁾。事実、戦後の日本の大衆文化の中身の多くは欧米に源流があり、日本がそれをうまく吸収し、再創造したものである。このような特徴は香港の大衆文化、韓国の大衆文化の場合も指摘できるところである。

中国では日本の大衆文化が受容された時期がちょうど長い間の鎖国体制から経済の改革開放に向かう頃であって、社会主義の硬直した文化芸術に疲れた人々に繊細で優雅な感じを与える日本の大衆文化はとても新鮮なイメージとして映ったものである。80年代から90年代前半にかけて韓国では公式的には日本の大衆文化が禁止されていたが、それでもさまざまなルートを通して日本の大衆文化が韓国に広範に流入し、日本の大衆文化のコピーもこの時期に最も盛んに行なわれていた。日本の大衆文化が成長期の韓国の大衆文化にさまざまな影響を与えたことは明らかである。

日本の大衆文化には、アメリカの大衆文化ほどの民主主義・自由などの明確な理念に欠けているとも言われるが、ドラマ『おしん』に日本人の勤勉性がメッセージとして伝わり、テレビのアニメ番組『一休さん』は子供向けに日本人の道德感を教える内容になっているなど、日本社会固有の価値観、美意識などがそこに表現され、受け入れ側に影響を及ぼしていたのである。

(4) 東アジアにおける韓国大衆文化の特徴

以上のように東アジアにおけるアメリカの大衆文化、香港の大衆文化、日本の大衆文化の受容過程を考察してみると、韓国の大衆文化の特徴がより明確に見えてくる。

まず、東アジアにおけるここ数年間の韓国の大衆文化の受容は韓国社会の経済発展に伴う文化産業の発達に直接的な理由があると考えられる。経済的発展によって大衆文化が文化産業として成立し、資本と技術の蓄積、人材の発掘と育成、積極的なマーケティング戦略などによって東アジアで商品性と競争力を獲得していることである。韓国のテレビドラマはKBS(韓国放送公社)、MBC(文化放送)、SBS(ソウル放送)などの複数の放送社の競争体制下で制作され、厳しい競争によって質のよい作品が大量に制作されている。ここ数年間は韓国のテレビドラマの全盛期であり、実に多くのドラマが制作され、これらのドラマが次々と新しいタレントを輩出している。韓国映画は90年代末までは東アジアにおいても目立つ存在ではなく、国内においては本国映画の上映を義務づけ

る「スクリーンクォーター制度」によって映画が保護されてきたが、99年に映画『シュリ』が大ヒットした頃から、ここ数年間に次々とヒット作が登場し、韓国社会で映画に対する関心が急速に上がっている。これには韓国社会の民主化の進展に伴い、映画に対する規制がなくなり、映画の題材が多様化したこと、大手企業の参入により豊富な資本が映画制作に投入できたこと、多くの高等教育機関に映画演劇学科が設けられ、監督・俳優の養成が体系的に行われたことなどが理由に上げられる。韓国映画は長い間商品性に欠け、国際的に評価される映画も韓国社会の特殊性を強調するものが多かったが、ここ数年間は娯楽映画が多くなり、制作技術が一段と向上したこともあって、商業的にも成功しつつある。韓国のアニメ・漫画もここ数年間発展が早く、裾野が広がっている。ポップスの世界でもここ数年の発展が目覚しく、大勢の個性のあるミュージシャンが登場し、海外公演に成功する事例も増えている。

次に、東アジア社会全体の発展により、大衆文化に対する需要が高まり、多様性を求める傾向が強まるところに、韓国の大衆文化が一味違う特色を持って新鮮な感じで受け入れられていることである。最近の日本で上映される韓国映画は、ハリウッド映画、日本の映画とも違い、且つ派手なアクションも多く、観る楽しさがあるところが人々の関心を引き寄せている。東アジア各国で人気が出ている韓国のドラマも若い男女の愛、家族問題などを主題とするものが多く、外国の人にも分かりやすい上に、純粋な愛と情熱的な人間関係が人々の心を捉えることが多く、近代と伝統がよく調和された社会というイメージが魅力的でもある。時代劇など過度に韓国的な色彩を帯びているものよりは、現代の社会生活を反映していて、普遍性があり、韓国的特性が加味されたものが歓迎されている。

それから、韓国の大衆文化が東アジアにおいても特に中国語圏、ベトナム・モンゴルなどの中国文化圏で歓迎されている点も注目される。同じ東アジアにおいても、日本で韓国の大衆文化を見る目と、中国・香港・台湾などが韓国の大衆文化を見る目には温度差のようなものがあり、タイ・マレーシア・インドネシアなどの東南アジアでは韓国の大衆文化が中国語圏ほど注目されていない事実を見ても、文化の共通性という要素が働いているように思われる。韓国(朝鮮)は歴史的に中国文化圏に属し、そのような背景が韓国の大衆文化を中国語圏・中国文化圏で受け入れやすくする一つの要因であろう。もちろん経済的・社会発展的差異があって、同じ内容も日本で反響がないものが、中国で反響を呼んだりすることもある。

3. 東アジアにおける韓国大衆文化の展望

本稿では、これまで東アジアにおける韓国の大衆文化の現状と特徴を調べてみたが、東アジアにおける韓国の大衆文化の今後の可能性についても簡単に触れてみたい。東アジアにおける韓国の大衆文化の受容はここ数年のことであり、韓国の大衆文化自体も流動性のあるものであるから今後の展開を簡単には予測し難い。それでも文化産業の成長による技術とノウハウの蓄積、新世代俳優・歌手の台頭と活躍、グローバル時代に合わせた海外との積極的な交流と合作、政府の積極的な大衆文化振興策など韓国の大衆文化が継続して発展する好条件が揃っている。東アジアにおける韓国の大衆文化の現在の人気には幾らか一過性のものであるが、堅実に発展していけば韓国の大衆文化は東アジアにおいて独自の位相を持ち続けると考えられる。

東アジアにおけるここ数年間の韓国の大衆文化の人気は、東アジア社会全体の発展により、大衆文化に対する需要が高まり、多様性を求める傾向が強まっているところに現れた社会現象であり、東アジアの均衡のとれた文化発展のためにも好ましい現象である。今後は中国・台湾の大衆文化の人気、そしてベトナム・モンゴルなどの大衆文化の人気へと続いて行けば、東アジアの大衆文化はより多様化され、グローバル化されるはずである。

注

- 1) 東アジア世界をどのように定義づけ、概観すべきかは、必ずしも明確ではない。東アジアは、北アジアないしは北東アジアという地政学的な定義とも重複する場合があり、歴史的にみてこの地域で強い影響力をもった中国を中心とする、漢字と儒教を共通の文化とする中国文化圏を東アジアだと規定することも多い。しかし、中国文化の影響は少ないが、地政学的に東アジアから分離しにくいモンゴルやチベットがあり、地理的に東南アジアに区分されるベトナム、シンガポールは文化的には中国文化圏に属する。一方、マレーシア、タイなどは華人社会の存在によって中国文化とも密接な関係がある。そのために、狭義の東アジアは、中国（香港・台湾を含む）、朝鮮（韓国）、日本、ベトナムを指し、広義の東アジアは、モンゴル、シンガポール、マレーシア、タイなどが含まれる。本稿で、韓国の大衆文化の受容が報告されている地域は、狭義の東アジアであり、そこにモンゴルが加わっている。
- 2) 大衆文化（英語では、popular culture、mass culture）とは、多量性・均質性・複製可能性・土

俗性・匿名性・流動性を内包した産業社会の文化現象の特徴を示す用語であり、大量生産 大量流通のシステムから出現した流行文化・消費文化、大新聞・テレビ・ラジオなどのマスメディア産業が媒介する視聴覚文化、様々なレベルの複製技術メディアの技術革新が媒介する複製文化、均質化された労働者の生活様式を前提とする中流生活文化、他にも低俗・通俗文化、風俗文化、都市民衆文化・民俗文化などが、普通大衆文化と呼ばれる。本稿で韓国大衆文化として取り上げているのは、主にドラマ、映画、ポップスなどである。

- 3) CLONとH.O.Tの北京公演の成功から「韓流」という新造語が生まれたという記事は多数のメディアが伝えている。本稿では、韓国の雑誌『月刊朝鮮』電子版の2001年11月号(朝鮮日報社刊)の記事「中国と東南アジアにおける韓流」、韓国の新聞『朝鮮日報』電子版の連載記事「韓流の中に国の進むべき道がある」(2001年8月26日・27日・30日付記事)、韓国の新聞『東亜日報』電子版の2002年8月13日付の韓中修交10周年特集記事に依拠している。
- 4) 同上の三つの記事による。
- 5) 例えば、韓国の『朝鮮日報』『東亜日報』『中央日報』、日本の『朝日新聞』『東京新聞』、中国の『光明日報』『北京青年報』などの新聞、韓国の雑誌『月刊朝鮮』などがそれである。
- 6) 韓国の新聞『ハンギョレ』電子版の2001年11月5日付の「朱鎔基韓流ブームのため韓国人俳優の名前も分かっている」という記事による。
- 7) 以上のような事実は、前掲の『月刊朝鮮』電子版の2001年11月号の記事と『朝鮮日報』電子版の連載記事「韓流の中に国の進むべき道がある」(2001年8月26日・27日・30日付記事)、『東亜日報』電子版の2002年8月13日付の記事による。
- 8) 同上の三つの記事による。
- 9) 以上のような事実は、韓国の新聞『スポーツ朝鮮』電子版の2002年10月11日付記事「崔智友、台湾『金馬奨映画祭』のプレゼンターに招かれる」、韓国の新聞『SPORTS TODAY』電子版の2002年9月29日付記事「イ・ミヨン、私も韓流スター」による。
- 10) 以上のような事実は、韓国の新聞『東亜日報』電子版の2002年8月18日付記事「韓国のドラマが初めて日本のテレビで放映」と韓国を紹介するインターネットサイト『ALL KOREA』(日本サムスン株式会社運営)の芸能ニュースによる。
- 11) 以上のような事実は、韓国の新聞『SPORTS TODAY』電子版の2002年9月22日・27日付記事「イ・テランが中国の南京でファンサイン会」「キム・ユミ韓中合作ドラマの主演女優に」、韓国の新聞『無等日報』電子版の2002年10月3日付の記事「『Baby vox』のキム・イジ韓中合作ドラマ『北京 我が愛』に出演」などによる。
- 12) 以上のような事実は、韓国の新聞『中央日報』電子版の2002年7月16日付記事「テレビドラマで日韓交流『ソナギ(夕立)』」と前掲の『ALL KOREA』企画の「韓日合作映画&ドラマ特集」による。
- 13) 以上の他にも、『ペパーミント・キャンディー』『銀杏のベッド』『アタック・ザ・ガステーション』『春の日は過ぎゆく』『Interview』『エンジェル・スノー』など多数の韓国の映画が日本で上映された。
- 14) 『朝日新聞』2002年7月6日付の「韓日映画フォーラム」(2002年6月19日に朝日新聞社主催)報道記事による。
- 15) 以上のような事実は、前掲の『東亜日報』電子版の2002年8月13日付の記事、「YAHOO CHINA」

に掲載されている中国の新聞『羊城晩報』の「映画・ドラマの韓流がアジアにブームを引き起こす」という2001年10月18日付の記事、「YAHOO CHINA」に掲載されている中国の新聞『南方日報』の「韓流がまたも広州に至る」という2002年7月5日付の記事、「YAHOO CHINA」に掲載されている上記の『羊城日報』の『猟奇的な彼女』が流行語になり、『恐韓症』が映画・ドラマ界に蔓延する」という2002年7月10日付の記事による。ここで『猟奇的な彼女』とは韓国の映画のことであり、『恐韓症』とは中国サッカー界における韓国を恐れる心理を指す言葉であるが、ここでは映画・ドラマ界にもこの言葉を適用している。

- 16) 韓国の新聞『中央日報』電子版の2002年9月19日付の記事「『トイレはどこですか』がベネチアで審査委員賞特別賞受賞」による。
- 17) 以上のような事実は、中国を紹介するインターネットホームページ「www.nicchu.com」に掲載されている、中国語圏の映画・芸能に関する連載コラム『毎週テレビ』の31番コラム「韓流」による。
- 18) 以上のような事実は、韓国を紹介するインターネットサイト『ALL KOREA』(日本サンソン株式会社運営)の「韓日合作映画&ドラマ特集」による。
- 19) 以上のような事実は、韓国の新聞『中央日報』電子版の2002年9月11日付の「『オアシス』ベネチアで監督賞、世界の中心へ」という記事による。
- 20) 以上のような事実は、同上の記事による。
- 21) 以上のような事実は、それぞれ『中央日報』電子版の2002年6月18日付の「『童僧』、上海映画祭で脚本賞受賞」という記事、同上新聞電子版の2002年9月20日付の「『童僧』、海外映画祭に相次いで招請を受ける」という記事、同上新聞電子版の2002年10月4日付の記事「洪尚秀監督、アジア・太平洋映画祭『監督賞』に」という記事による。
- 22) 以上のような事実は、韓国の雑誌『月刊朝鮮』2001年11月号(朝鮮日報社刊)の記事「中国と東南アジアにおける韓流」、『中央日報』電子版の2001年11月27日付の記事「『Baby vox』、14度目の中国ライブコンサート」、前掲のインターネットサイト『ALL KOREA』の記事「『ピンクル』万里の長城を超える」による。
- 23) 以上のような事実は、同上のインターネットサイト『ALL KOREA』の「5月は『S.E.S』が台湾を支配?」という記事による。
- 24) 以上のような事実は、同上のインターネットサイト『ALL KOREA』の「BoA、オリコンチャート2曲同時にTop10」という記事による。
- 25) 以上のような事実は、同上のインターネットサイト『ALL KOREA』の「BoA、日本のトップ歌手と全国ツアー」「BoA、イギリスの人気グループ『ウェストライフ』とデュエット」「BoA、テレビ朝日で放送予定の『イブのすべて』の主題歌を歌う」などの記事による。
- 26) 以上のような事実は、前掲の『月刊朝鮮』2001年11月号(朝鮮日報社刊)の記事「中国と東南アジアにおける韓流」、韓国の新聞『朝鮮日報』電子版の連載記事「韓流の中に国の進むべき道がある」(2001年8月26日・27日・30日付記事)、韓国の新聞『東亜日報』電子版の2002年8月13日付の韓中修交10周年特集記事、前掲のインターネットサイト『ALL KOREA』の記事「金賢珠『ガラスの靴』履いて韓流スター」などによる。
- 27) 以上のような事実は、『中央日報』電子版の「韓国産ミュージカル『キャンブラー』日本進出」という記事、『中央日報』電子版の2002年9月13日付の「『NANTA』、米ブロードウェイに進出」とい

う記事による。

- 28) 日本のアメニの制作に韓国スタッフが加わることが増えているのは周知の事実であり、韓国の漫画が日本と台湾で連載、または出版されているという事実は、『毎日新聞』電子版の2001年8月1日付の「韓国漫画が本格上陸」という記事、韓国の漫画雑誌『漫画朝鮮』電子版の2002年3月4日付の「今台湾は韓国漫画のブーム」という記事による。
- 29) 以上のような事実は、『中央日報』電子版の2002年1月22日付の「韓国オンラインゲーム、日本で人気」という記事、『中央日報』電子版の2002年5月2日付の「オンラインゲームも『韓流ブーム』」という記事による。
- 30) 以上のような事実は、多くのマスメディアにおいて報道されているものであり、ここで具体的な根拠を提示しなくてもよいと思われる。
- 31) 以上のような事実は、「YAHOO CHINA」に掲載されている、2002年8月23日付の中国の新聞『北京青年報』の「音楽に始まり、映画・ドラマが後を継ぎ、図書がまたやってくる」という記事による。
- 32) 五十嵐暁郎編著『変容するアジアと日本 アジア社会に浸透する日本のポピュラーカルチャー』(世織書房、1998) p.12~13。

主な参考文献

- 五十嵐暁郎編著『変容するアジアと日本 アジア社会に浸透する日本のポピュラーカルチャー』、世織書房、1998。
- 石井健一編著『東アジアの日本大衆文化』、蒼蒼社、2001。
- 朴順愛・土屋礼子編著『日本大衆文化と日韓関係 韓国若者の日本イメージ』、三元社、2002。
- 『ユリイカー詩と批評』2001年11月号 「特集 韓国映画の新時代」、青土社。
- 可児弘明編『もっと知りたい香港』(第2版)、広文堂、1999。
- 可児弘明編『もっと知りたい台湾』(第2版)、広文堂、1998。

インターネットの主な参考サイト

- <http://www.allkorea.co.jp/> (日本サンスン株式会社運営の韓国を紹介するサイト)
- <http://www.hanliu.com.cn/> (上海永旭ソフト会社運営の韓国を紹介するサイト)
- <http://www.chosun.com/> (韓国『朝鮮日報』電子版)
- <http://www.donga.com/> (韓国『東亜日報』電子版)
- <http://www.hani.co.kr/> (韓国『ハンギョレ』電子版)
- <http://www.joins.com/> (韓国『中央日報』電子版)
- <http://www.asahi.com/> (日本『朝日新聞』電子版)